タンポポ

岡崎市根石保育園（愛知県岡崎市）　［３～５歳児］

＜４月２８日「みんなで絵本を見る」＞

・４歳児Ａ児が登園途中で見つけたタンポポを、保育者が大切に受け止め、カップに入れて水に指しておいた。しばらくして、綿毛になった。小さな小さな綿毛に興味を示し、目を向けることができていた。その頃『たんぽぽ』の絵本を読む。(※『たんぽぽ』かがくのとも傑作集　どきどきしぜん：平山和子文・絵、北村四郎監修)

・長い根っこのページでは５歳児Ｂ児「うわぁーすげえー！」Ｃ児「なげえー！」と驚く。保育者は「すごいね！」と共感する。

・種から出てきた芽のページになった時「幼虫がいるー」と声がとんだ。
保育者が「これ何だと思う？」と聞くと、Ｂ児「何かくっついてる」Ｄ児「食べられている！」などと、種だと気が付かない様子。

・絵本で綿毛がくっ付いている所を見せる。数人の子が「綿毛だー！」と言うが３歳児はピンとこないようで「タンポポ？」「綿毛？」とぼそぼそ言っている。

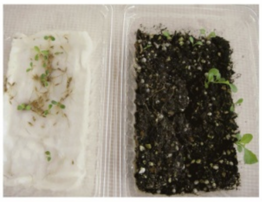
・綿毛の種を知ることができたので、実際に本当に芽が出るのかやってみることになる。

＜５月１０日「タンポポって芽がでるの？」＞

・湿らせた綿を入れた容器と土を入れた容器を用意し、それぞれに綿毛の種を蒔いた。手洗い場の日当たりの良い所に並べて置く。ルーペで観たり、「まだ出ん」といっている子どももいる。１週間ほど変化なし。

・発芽に気付いた保育者が、子どもに「ねえーねえー」と言葉をかけてみた。

・５歳児Ｅ児が気付き「わ！！出た！芽が出たよ！」と言う。その声にＢ児、Ｆ児、Ｇ児が集まり、ルーペを覗き「本当だ出てる！」と言う。



・Ｈ児は「こっちは？」と土の方を覗く。「こっちはまだだ」と、絵本を持ってきて比べて見ている子どももいる。芽を見て「かわいいね」と口々に言っている。

・その翌日、土の方も芽を出す。みんなで「ヤッター！」と興奮し大声を出す。ルーペで盛んに見ている。３歳児は「フーッ」と吹いて綿毛がなびくのを楽しんでいる。芽も飛ばされて容器の隅に追いやられてしまった。
霧吹きで水をあげている子もいて発芽に興味を示している様子がよくわかった。

＜５月１８日「どんな音が出るかな？」＞

・綿毛が全部飛んで茎だけになったので、保育者が茎を千切り「ブーブー」と、吹いてみせた。４歳児Ｉ児、Ｊ児が側に来て「何鳴らしたの？」と興味を示し、ジーッと見ている。保育者が「ほらこれ！」と茎を見せる。

・シービービー（カラスノエンドウ）を鳴らし遊んだ経験があるＢ児が、「それも鳴るの！」と驚く。今まで見向きもしなかった茎がいきなり大人気。

・Ｂ児、Ｉ児は自分で丁度よい長さに千切り、夢中になる。すぐ鳴らせて得意になっている。鳴らしているとすぐにフニャフニャになることに気付き「早く見せなきゃ！」と言い、他の保育者に報告している。

・保育者が「どっちの音が高いかな？」と尋ねると、子どもたちはよく聞いて「こっちだよ」「大当たり」と音を出し合い、音の違いを楽しむことができた。

［考察］　Ａ児の持ってきたタンポポの変化に子どもたちが興味を示したことで様々な発見をし、絵本を見て綿毛から芽が出ることを知った。そしてさらに興味を深め探求心に繋がった。絵本の通りに芽が出た姿を見て子どもたちも保育者も驚き、実証が何にも勝ることを感じる実体験となった。
また、保育者自身も変化していくタンポポに不思議さを感じ、言葉にしたことで子どもたちの気付きにつながり、継続して観察していくようになった。とても小さなタンポポの種が確かに芽を出した瞬間はとても感動し、「すごい！」と感じた。植物にも虫と同じように命があるという実体験も味わうことができたと考える。保育者が子どもの思いに丁寧に寄り添い共感していくことが、子どもたちの探求心を膨らませていくことに繋がることを感じた。

（みどころ）みんなで絵本を見た共通経験から、タンポポのことをより知りたくなり、興味・関心が高まっていることがわかります。タンポポに関わり、友達や保育者と互いに感じたことを伝え合い・受け止め合う人間関係の中でタンポポの発芽などへの探求心も育まれています。このような過程から「科学する心」の育ちが期待できます。